

## 『御文』における「タノム」の語義について

田 代 俊 孝

### はじめに

蓮如は、『蓮如上人遺徳記』で

「寛正初暦の比より、末代の劣機を鑑て、経論章疏師資の銘釈を披閲して、愚凡速生の肝府を撰取して、数通の要文をつくり玉へり。是末代の明灯なり。偏に濁世の目足なり。」（原力タカナ。以下同じ）<sup>〔1〕</sup>

と云い、さらに『蓮淳記』には、

「御文を御つくらせさふらふ事は、安芸法眼申されさふらひて御んつくりさふらひて、各有難く存じさふらふ。かるく」と愚痴の者のはやく、心得まひらせさふらふやうに、千の物を百に選ひ、百の物を十に選はれ、十の物を一

に早く聞分け申様にとしめされ、御文にあそはあらはされて、凡夫の速かに仏道なる事をおほせたてられたる事にてさふらふ。開山聖人の御勸化今一天四海にひろまり申す事は、蓮如上人の御念力によりたる事に候也。」

と記されている。ここに、『御文』の造意がうかがえる。そして、『御文』が今も浄土真宗の本願寺系教団においては、勤行の後に、必ず拝読され、門徒教化の大きな媒体となっている。それだけに、その解釈は厳密であらねばならない。

その『御文』に、帖内、帖外を問わず、「タノム」という言葉が多用されていることは周知のとおりである。例えば、「弥陀をタノム」とか、「一念にタノミたてまつる」といった言い方である。しかし、この言葉は現代語では一般的に「頼む」の意味で使われることが多く、その意味で解釈すると真宗の教義的立場に矛盾し、大きな誤解を招くことになる。それゆえ、『御文』で使われる「タノム」の語義を改めて考察してみたい。

これまでに、『御文』の講録をはじめ、昭和初期の論文雑誌、さらには『真宗研究』第四号などにも、この意味確認が、取り上げられているが、いずれも、東西両派の教義的解釈の相違、それに真宗各派による宗派意識に重きが置かれ、対立的に述べられている。言うまでもないが、この了解が、本願寺派においては幕末期に三業惑乱の動因となり、宗派の存亡を揺るがす大事件となっている。このような事件は大谷派においても見られ、それを、機に各宗派の理解が、宗義をよりどころに硬直化し、一方では、客観的考察ができていない。したがって、その後の領解は、「たのむたすけたまへ」という論題で統一され、理解が教条的になり、伝統的解釈の重積になっている。したがって、客観性にかけ、新鮮味もなく、信順派、請求派、祈願派などと対立的論調に終始している。それゆえ、『御文』で使われる「タノム」の語義を客観的に今日の視点、今日的研究方法で改めて確認してみたい。

## 一、浄土教の仮名法語における「タノム」の使用例

浄土教の仮名法語において「タノム」の語を用いられた例をあげると、源信の『横川法語』に、

「信心あさくとも本願ふかきゆへに、たのめばかならず往生す」<sup>(3)</sup>

とあり、また、法然においては、『和語燈録』に

「抑機をいへば、五逆重罪をえらばず、女人闍提をもすてず、行をいへば、一念十念を以てす。これによって、五障三従をうらむべからず。この願をたのみ、この行を上げむべき也。念仏のちからにあらずば、善人なをむまれがたし、いはんや悪人をや、五念に五障を消し、三念に三従を滅して一念に臨終の来迎をかうぶらんと、行住坐臥に名号をとなふべし。時處諸縁にこの願をたのむべし」<sup>(4)</sup>

『西方指南抄』下末には、

「かの仏の恩徳をたのみてもなほたのむべきは、乃至十念の御言、信じてもなほ信すべきは必得往生の文なり」<sup>(5)</sup>

と、あり、さらに、聖覚の『唯信鈔』にも

「専修といふは、極楽をねがふころをおこし、本願をたのむ信をおこすより、たゞ念仏の一行をつとめて、またく餘行をまじえざるなり」<sup>(6)</sup>

のほか、「主君にちかづき、これをたのみてひとすちに忠節を尽くすべき」<sup>(7)</sup>、「本願の引導をたのむべし」<sup>(8)</sup>、「信心といふ

は、ふかく人のことばをたのみて<sup>(9)</sup>、「ふかくた(の)みたる人の<sup>(10)</sup>」、「ふかくたのみて、そのことばを信じてんのち<sup>(11)</sup>」、「もときゝしことをふかくたのむ、これを信心というなり<sup>(12)</sup>」、「願力をたのまざる人は<sup>(13)</sup>」の七か所で使われている。

また、隆寛の『一念多念分別事』でも、

「一念无上の功德をたのみ<sup>(14)</sup>」

「ただ弥陀の願をたのみはじめてむ人は、いのちをかぎりとし<sup>(15)</sup>」

と、二か所で使われている。

『自力他力事』では、「弥陀のちかいをたのみあふぎて<sup>(16)</sup>」、「釈迦如来ねんごろにすゝめおはしましたる事をふかくたのみて<sup>(17)</sup>」、「ひとへに自力をたのみたるは<sup>(18)</sup>」と、三か所に、『後世物語聞書』では、「仏の御ちからをたのまずとも生死をはなれむ<sup>(19)</sup>」、「他力をたのまぬこゝろ<sup>(20)</sup>」、「他力をたのみたるところ<sup>(21)</sup>」、「阿弥陀仏をたのむこゝろ<sup>(22)</sup>」の四か所に使われている。

したがって、仮名法語では、広く一般に、「タノム」は、意味的には、自力、他力関係なく「信じる」の意味で使われている。しかしながら、聖覚、隆寛の場合は、「本願をたのむ」「阿弥陀仏をたのむ」「仏力をたのむ」などきわめて真宗に近い表現である。このことは下で詳述したい。

## 二 『御文』における「タノム」使用例

蓮如においても、このような浄土教の仮名法語の伝統を踏襲して、「タノム」を多く使用されている。『御文』の「タノム」については、古来、信順の意味か祈願（請求）の意味かで論議を呼んできた。<sup>(23)</sup>ただ、『御文』の場合は、意味的に、使用が限定されている。

「タノム」の使用箇所を見ると『五帖御文』では、まず、一帖目に<sup>(24)</sup>

「本願たのみ決定心をえたる信心の行人」(一の二)

「一向に弥陀をたのみまいらせて」(一の七)

「弥陀をたのみまいらせさふらはんするやらん」(一の十)

「弥陀をたのまんと」(一の十)

「一心一向に弥陀をたのみたてまつりて」(一の十)

「一向に弥陀如来をたのみたてまつりて」(一の十三)

「阿弥陀仏を一向にたのむによりて」(一の十五)

「弥陀如来を一心にたのみたてまつりて」(一の十五)

「この南无阿弥陀仏の名号を南无とたのめば」(一の十五)

『御文』における「タノム」の語義について

と、九か所で使われている。

以下、二帖目に十か所、三帖目に十七か所、四帖目に二十か所、五帖目に三十七か所、計九十二か所に使われている。

また、『帖外御文』では概ね百二十七か所に使用されており、総計約二百二十か所に使用されている。

そこで、全使用例中、何に対して「タノム」のか、タノム対象別に見てみると、

① 阿弥陀仏（如来）をタノムもの

『五帖御文』八十八例、『帖外御文』百十六例

② 本願をタノムもの

『五帖御文』一例、『帖外御文』六例

③ 諸仏（応化身）をタノムもの

『五帖御文』一例、『帖外御文』二例

④ 来迎をタノムもの

『五帖御文』なし、『帖外御文』二例

⑤ その他をタノムもの

「聖道諸宗の教にをよはねは、それをわかたのます、信せぬはかりなり」(二の三)<sup>(25)</sup>

「人間にをひてもまつ主をはひとりならてはたのまぬ道理なり」(二の九)<sup>(26)</sup>

このほかに、「タノム」を説明するために「タノム」を使用しているものに

「そのたのむこゝろといふは、すなわちこれ阿弥陀仏の衆生を八万四千の光明のなかに摂取して、往還二種の回向を衆生にあたへましますこゝろなり。」（四の六）<sup>27</sup>、

明らかに阿弥陀如来の功德を指して、

「无上大利の功德力をたのみ申す」（帖外一二七）<sup>28</sup>

といったものがある。

以上の使用例の中で①、②、③は、後節でも述べるが、明らかに他力の立場で、タノムが使われている。④、⑤は二百二十例中わずかに四例であるが明らかに前者とは、異なった意味で使われている。他力の立場での使用の根拠がどこから来るのか。次に親鸞の使用例から考察してみたい。

### 三 親鸞における「タノム」の使用例とその意味

「行巻」所引の浄土教伝統の疏書の上にその使用例を見ると善導の『往生礼讃』と元照の『観経義疏』に合わせ

て四例みられる。

『往生礼讃』<sup>29</sup>

「今既にこの勝益有します。憑むべし。願わくば諸の行者、各の至心を須いて往くことを求めよ。」（「行巻」所引『往生礼讃』<sup>30</sup>）

『御文』における「タノム」の語義について

「今、所修の念仏三昧に約するに、乃し仏力を憑む。」（『行巻』所引『觀經義疏』<sup>(31)</sup>）

「法を聞き道を悟るは、須らく他力を憑むべきがゆえに、往生淨土を説く」（『行巻』所引『觀經義疏』<sup>(32)</sup>）

また、親鸞の御自釈の文においても、

「曇鸞大師は入正定之聚と云えり。仰いで斯を憑むべし。」（『行巻』<sup>(33)</sup>）

「難化の三機・難治の三病は、大悲の弘誓を憑み」（『信巻』<sup>(34)</sup>）

と二例あるが、いずれも「憑」の字が使われている。これらを合わせて『教行信証』では、六例いずれも、「憑」が使われている。

さらに、親鸞は「タノム」を仮名遣いで、

「本願他力をたのみて自力をはなれたる、これを唯信という」（『唯信鈔文意』<sup>(35)</sup>）

「これらはひとへに自力をたのむものなり。別解は、念仏をしながら、他力をたのまぬなり。」（『一念多念文意』<sup>(36)</sup>）

「自力といふは、わがみをたのみ、わがこゝろをたのむ、わがちからを上げみ、わがさまぐの善根をたのむひとなり。」（『同』<sup>(37)</sup>）

と、使っている。この場合もちろん、依憑の意味である。

次いで、「行巻」名号釈において

「爾者、南无之言は、帰命なり。帰の言は、至也。又、帰説（よりたのむなり）也。説の字、悦の音、又帰説（よ）りかかるなり）也。説の字、税の音、悦税の二音は告ぐる也。述也。人の意を宣述る也。命の言は業也。招引也。



使也。教也。道也。信也。計也。召也。是を以て帰命は本願招喚之勅命なり<sup>(38)</sup>

と釈する。

つまり、親鸞は、梵語の「南無」を「帰命」と訳し、「帰」に「よりのむ」、つまり、「依憑」の意味を見出している。まさしく、「憑む」とは、本願を憑むことであり、阿弥陀に帰命・帰依し、本願招喚之勅命を得る意味と理解している。それゆえ、「本願他力をたのみて」とか「他力をたのむところ」というのである。

また、『和讃』においても、次の五例がある。

「本師道綽大師は

涅槃の広業さしおきて

本願他力をたのみつゝ

五濁の群生すゝめしむ」<sup>(39)</sup>〔高僧和讃〕

不了仏智のしるしには

如来の諸智を疑惑して

罪福信じ善本を

たのべば辺地にとまるなり」<sup>(40)</sup>〔正像末和讃〕

仏智不思議をうたがひて

善本徳本のむひと

『御文』における「タノム」の語義について

辺地懈慢にむまるれば

大慈大悲はえざりけり〔正像末和讃<sup>(41)</sup>〕

自力の心をむねとして

不思議の仏智たのまねば

胎宮にむまれて五百歳

三宝の慈悲にはなれたり〔正像末和讃<sup>(42)</sup>〕

仏智うたがふつみふかし

この心おもひしるならば

くゆるこゝろをむねとして

仏智の不思議をたのむべし〔正像末和讃<sup>(43)</sup>〕

これらは、いずれも「憑む」の字の意味で使われている。

このように、親鸞は、いずれもタノムに「憑む」の字を用い、仮名で書く場合も「憑」の意味で使用している。ところで、「タノム」について、『広辞苑』には、頼む、恃む、憑む、の三字を挙げる。<sup>(44)</sup> 各々について『大漢和辞典』によると、

「頼」は、・たよる。・たより。・あまる。四<sup>(45)</sup>とる。……

「恃」は、・たのむ。・よる。・属に通ず。<sup>(46)</sup>……

「憑」は、・よる。①たよる。たのむ。㊦もたれる。㊧つく。のりうつる。㊨やどる。すむ。㊩もとづく。・よせる。―託する。まかす。・よりどころ。㊪しるし。㊫あつい（厚）。㊬さかん。㊭みちる。㊮いかる。㊯大いにとある。

したがって、「憑」つまり、依憑は、①たよる。たのむ。㊦もたれる。㊧つく。のりうつる。あるいは、・よせる。―託する。まかす。であり、祈願の意味ではなく、信順の意味である。

ところで、『歎異抄』には、

「自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。」（『歎異抄』三条<sup>(48)</sup>）を初めとして十一か所で「タノム」が使われている。（了祥師は『歎異抄聞記』で取意を含めて十三か所という。）それについて『歎異抄聞記』には、

「此鈔（『歎異抄』）でたのむといふことの、是程出るといふ訳は、上に弁ずるごとく、第一章の「たゞ信心を要とす」からが『唯信鈔』に依ったもので何事も『唯信鈔』が拠になって居る。その『唯信鈔』に三心の中、深心を述するに就いて、「深心といふは信心なり。まづ信心の相をしるべし」と云ふて、信をたのむとして、人の言をたのむに例して、たのむで信心がのべてある。それを取ってきて此鈔では、信心のすがたを皆たのむで知らせたものとみゆる。<sup>(49)</sup>」

と、述べられる。つまり、『歎異抄』の「タノム」は聖覚の『唯信鈔』に拠るものと見ている。

さらに、

「仍て蓮師の『御文』のたのむは、必ず此鈔と合して見ねばならぬ筈のこと。（中略）他力の弥陀へ我身を思い切つて罪惡の凡夫出離の縁さらになしと見限りてするが、我身に心残さず思ふからなげる（帰投）といふたもの。直に「信心深くば」と受けて機法二種の深信で、機を捨て、法に随うがたのむ帰命といふこと。どこでも此義で動くなり。『御文』の雜行雜修自力の心を投げ捨て、弥陀にすがると同じ事。固より帰の字に捨也と漢書中あり。（中略）依て我を捨て、弥陀に帰する機法の深信が帰命の體ぢやと見ると、迷うことはない。そこが蓮師の『御文』と、此鈔の一致<sup>(90)</sup>じゃ。」

といい、『御文』の「タノム」は『歎異抄』の「タノム」をうけたものと見ている。

したがって、『御文』の「タノム」は、他力信心の相の表現として『唯信鈔』（聖覚）↓『歎異抄』（親鸞）↓『御文』（蓮如）という相承の中で使われてきた語といえる。つまり、蓮如の「タノム」の根拠は親鸞にあり、親鸞の拠り所は『唯信鈔』だったのである。

#### 四 『御文』における「タノム」の意味

上述のように親鸞の「タノム」の理解が蓮如の根拠になっていることは言うまでもない。

したがって、今、蓮如の場合も『御文』で、上の①「阿弥陀（如来）をたのむ」、②「本願をたのむ」、③「諸仏（応化身）をたのむ」といった場合、「タノム」も「憑」の意味で使っていると考えるのが妥当である。

ただ、④来迎をタノムもの、⑤その他をタノムもの二例については、自力の立場による祈願の意味があり、「頼」の意味と考えるのが妥当である。当然のことながら、これについて、蓮如はいずれも否定的な立場で述べたものである。ところで、注目べきは、蓮如自身が「タノム」について、次のように釈していることである。

「そのたのむころといふは、すなはちこれ、阿弥陀仏の衆生を八万四千の大明明のなかに摂取して、往還二種の廻向を衆生にあたへましますころなり。」(四の六)<sup>(21)</sup>

と、帰依、信順による如来の廻向を意味するものとして理解している。もっと言えば、上の『大漢和辞典』の「憑」の意味には、・に①たよる、たのむ、だけでなく、(阿弥陀如来が)②つく、のりうつる、③やどる、すむ、の意味がある。すなわち、それが廻向の意味である。また、・によせる、——託する、まかす、の意味からすれば、それが、(本願に)「乗託する」という意味である。このような意味で、『御文』では「タノム」が使われている。

また、『実悟記』四十六には、

「一度本願に帰しつゝ、弥陀をたのみ奉る信心は、仏よりさすけ給心也。たのむ衆生の心は、阿弥陀如来の心光に摂取したまふてすて給ふべからず。」<sup>(22)</sup>

と、述べられる。

したがって、『御文』における「タノム」は「阿弥陀仏の、衆生を八万四千の

大明明のなかに摂取して、往還二種の廻向を衆生にあたえますころ」であり、本願、他力に依憑し、乗託する意味と解される。

一方、この「タノム」を別のことで表現されていないかどうか、『御文』の異本との対照によって確かめてみたい。  
まず、四の十の

「されば、弥陀をば、なにとやうにたのみ」(四の十)<sup>(53)</sup>

は、異本である「名塩教行寺本」四の六七では、

「しかれば、なにとやうに阿弥陀如来をば信じ」<sup>(54)</sup>

となっており、「たのみ」は「信じ」といいかえられている。

同様に、帖外一〇八の、

「一すちに弥陀の本願を信じ」(帖外一〇八)<sup>(55)</sup>

も、異本である「行徳寺道宗本」三の八では、

「一心に弥陀の本願をたのみ」<sup>(56)</sup>

と、なっており、「信じ」は「信じ」「たのみ」と言い換えられている。

また、一の十五の、

「この南无阿弥陀仏の名号を南无とたのめば、かならず阿弥陀仏のたすけたまふといふ道理なり。」(一の十五)<sup>(57)</sup>  
は、この異本である「行徳寺蓮如真蹟本」第四通では、

「この南无阿弥陀仏の名号を南无と帰命すれば、かならず阿弥陀仏のたすけたまふといふこゝろなり。」<sup>(58)</sup>

と、「たのめば」は「帰命すれば」と言い換えられている。

また、五の十三の、

「一念阿弥陀仏に<sup>・</sup>帰<sup>・</sup>命<sup>・</sup>せ<sup>・</sup>ば」(五の十三)<sup>(59)</sup>

も、異本である「名塩教行寺本」四の七六では

「一念に阿弥陀を後生御たすけ候へと、一念にふかくたのみまひらせんものをば」<sup>(60)</sup>  
となっている。

つまり、「タノム」は、「信じ」あるいは、「帰命する」と言い換えられている。そのほか、『五帖御文』を中心に、「タノム」を他の言葉で表現しているものを以下に、あげて対照してみる。

「たゝひとすちに弥陀如来を信したてまつりて」(三の七)<sup>(61)</sup>

「たゝひとすちに阿弥陀如来を一心一向にたのみたてまつりて」(五の二二)<sup>(62)</sup>

「南无の二字は衆生の弥陀仏を信する機なり。」(三の七)<sup>(63)</sup>

「南无の二字は衆生の弥陀をたのみ機のかたなり」(四の十四)<sup>(64)</sup>

「何と弥陀をたのみて報土往生をはとくへき候哉らん」(四の十一)<sup>(65)</sup>

「なにとやうに弥陀を信すへきそといふに」(五の十四)<sup>(66)</sup>

「後生たすけたまへと、たのみまうすころなり。」(四の十一)

「後生たすけたまへとふたころなく信じまいらすころを」(三の二二)<sup>(68)</sup>

「いよ／＼阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて」(四の十四)<sup>(69)</sup>

『御文』における「タノム」の語義について

「いよ／＼弥陀を信したてまつるべきものなり。」(外三七)<sup>(70)</sup>

「一向にふたこゝろなく弥陀を信するはかりなり。」(一の十五)<sup>(71)</sup>

「一向に阿弥陀如来をたのみまひらせてふたこゝろなきを本願を信する人とはまふすなり」(外九九)<sup>(72)</sup>

「抑阿弥陀如来の他力本願をはなにとやうに信し。」(三の二)<sup>(73)</sup>

「阿弥陀如来の本願をばなにとやうにたのみ。」(外九七)<sup>(74)</sup>

これらは、いずれも「タノム」と「信じる」が置き換えられている。それでも文意にほとんど変わりはない。したがって、『御文』における「タノム」は、他力の立場に立つ「信じる」あるいは、「帰命する」の意味で使われていることがわかる。

## 五 「たのむ一念」と「南無とたのむ」について

「タノム」とは、単なる我々の宗教的請求としての「タノム」ではない。帰命の一念の信心の相(すがた)を示したものである。そこでは、「唯信」つまり、「他力たのみて自力をはなれたる」転換がなされている。それが、蓮如においては、「雑行をすてゝ後生たすけたまへと弥陀をたのめ」と表現され、本願招喚の勅命に信順する帰命の姿である。まさしく、信樂開発の時刻の極促を具体的に示したものである。たとえば、

「されば、雑行雑善をなげすてゝ、専修専念に弥陀如来をたのみたてまつりて、たすけたまへとおもふ帰命一念を



こるとき、かたじけなくも遍照の光明をはなちて、行者を撰取したまふなり。」(三の六)<sup>(75)</sup>

「一向にもろ／＼の雜行雜修のわろき執心をすて、弥陀如来の悲願に帰し、一心にうたがひなく、たのむころの一念をこるとき、すみやかに弥陀如来光明をはなちて、そのひとを撰取したまふなり。これすなわち仏のかたよりたすけましますころなり。またこれ、信心を如来よりあたへたまふといふも、このころなり。」(外一)<sup>(76)</sup>

といった表現が随所にみられる。往生をとげたいという「たのむ一念」つまり、「帰命の一念」が、単なる宗教的祈願ではなく、「信心を如来よりあたへたまふ」ものであり、すでに、如来の願力にもよおされておこるものであるという理解である。まさしく、「往生をばとぐるなりと信じて、念仏まふさんとおもひたつころのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり」(『歎異抄』第一条)<sup>(77)</sup>と同じである。信の一念が全く如来回向のものであることを示すものである。

しかもそれが、「たのむころの一念をこるとき、すみやかに弥陀如来光明をはなちて、そのひとを撰取したまふなり。」といわれるように、「信樂開發の時剋の極促」であり、「念仏もうさんとおもいたつころのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあづけしめたまう」のである。「たのむ一念」とは、正しく「ひとたびの回心」の姿を表現したものである。

さらに、その撰取不捨の救済の道理を示したものが「南無とたのむ」という表現である。

蓮如は、『御文』のいたるところで、「南無とたのむ」といい、次いで善導の六字釈を引用し、「南無とたのむ機」「阿

弥陀仏とたすけます法」と、独自の念仏理解を展開する。

「南无とたのめはかならず阿弥陀仏のたすけたまうといふ道理なり。」(一の十五)<sup>(76)</sup>

「南无の二字は衆生の阿弥陀仏を信ずる機なり。つきに、阿弥陀仏といふ四の字のいはれは、弥陀如来の衆生をたすけたまへる法なり。」(三の七)<sup>(77)</sup>

「南无の二字は衆生の弥陀をたのむ機のかたなり。また、阿弥陀仏の四字はたのむ衆生をたすけたまふかたの法なるがゆへに、これすなわち機法一軌の南无阿弥陀仏とまうすころなり。」(四の十四)<sup>(78)</sup>

「南无と帰命する機と阿弥陀仏のたすけます法とが一軌なるところをさして、機法一軌の南无阿弥陀仏とはまふすなり。」(四の八)<sup>(79)</sup>

つまり、前者を機の深信、後者を法の深信に配当し、「機法一軌の南无阿弥陀仏なり」と示し、二種深信の救済原理が、南无阿弥陀仏の六字の語義に込められていると解釈するのである。

もとより、これは、上述の「行巻」名号釈によるものである。「行巻」では

「爾者、南无之言は帰命なり。帰の言は、至也。又、帰説(よりのむなり)也。説の字、悦の音、又帰説(よりのむなり)也。説の字、税の音、悦税の二音は告ぐる也。述也。人の意を宣述る也。命の言は業也。招引也。使也。教也。道也。信也。計也。召也。是を以て帰命は本願招喚之勅命なり。」<sup>(80)</sup>

と、南無とは帰命であり、それに「よりのむ」の意味を見出し、「本願招喚之勅命」と解釈している。これこそが「本願をたのみて自力をはなれたる」『唯信鈔』唯信の立場である。もちろん、それが、南無とは帰命であり、発願回

向の義であるとした善導の六字釈からの展開であることは、いうまでもない。

したがって、第四節で述べたように、「南無する」は、「帰命する」、「タノム」、「信じる」はほぼ同義語として使われており、それは「発願回向の義」であり、他力回向の信、つまり、大信である。そして、「阿弥陀仏」とは、即ちその行、つまり、阿弥陀如来の太行そのものであるとの意である。

蓮如は、念仏一つに、太行あり、大信あり、機の深信あり、法の深信あり、真宗の救済原理そのものを意味づけている。それゆえ、

「当流の安心の一義といふは、たゞ南无阿弥陀仏の六字のこゝろなり」(五の九)<sup>(8)</sup>

と述べ、『御文』では随所に「六字のいわれ」「六字こころ」をたずねよと繰り返し勧めている。「南無とたのむ」念仏理解に真宗の救済原理を根拠づけているのである。

## むすび

以上、『御文』における「タノム」の語義を考察してきた。その語義は、宗教的祈願を指すものではなく、如来回向の信心の相をしめす言葉であった。したがって、「タノムは」(依)「憑」であり、「南無する」、「帰命する」、「信じる」とほぼ同義語として使われている。そのような理解がなされた背景は、善導以来の「憑」という表現を踏襲する『教行信証』における「憑」の表記が根拠になったことはいうまでもない。また、仮名法語においては了祥師の指摘からすれ

ば、『唯信鈔』↓『歎異抄』↓『御文』という伝統と相承があったと考えられる。

そして、そこには、「たのむ一念」という表現でもって、信樂開発の時剋の極促たる「信の一念」を表現し、さらに、「南無とたのむ」という表現でもって、善導の六字釈、親鸞の名号釈を根拠に独自の念仏理解をしている。「たのむ一念」によつて如来回向の摂取不捨の利益にあずかる回心の相を表現している。

そして、「南無とたのむ」念仏理解に、大行・大信、二種深信といった真宗の救済原理を根拠づけているのである。そして、念仏一つを勧め、「六字のいわれ」「六字ころ」を尋ねよと説き、自力の念仏宗との違いを鮮明にしているのである。かくして、『御文』における「タノム」の語義の深さを改めて解明することができた。不備は、今後の課題としたい。

註

- (1) 『真宗史料集成』二―七九一(以下、蓮如の『御文』、言行録、遺文等はすべてひらがなにした。)
- (2) 『真宗史料集成』二―四一二
- (3) 『真聖全』四―(一)―四三
- (4) 『真聖全』四―五九七
- (5) 『真聖全』四―二二一
- (6) 『定親全』六―(一)―四八
- (7) 『定親全』六―(一)―五〇
- (8) 『定親全』六―(一)―五三
- (9) 『定親全』六―(一)―五六

- (10) 『定親全』六―(二)―五六
- (11) 『定親全』六―(二)―五六
- (12) 『定親全』六―(二)―五六
- (13) 『定親全』六―(二)―五九
- (14) 『定親全』六―(二)―七六
- (15) 『定親全』六―(二)―七九
- (16) 『定親全』六―(二)―八四
- (17) 『定親全』六―(二)―八七
- (18) 『定親全』六―(二)―八七
- (19) 『定親全』六―(二)―一〇一
- (20) 『定親全』六―(二)―一〇六
- (21) 『定親全』六―(二)―一〇六
- (22) 『定親全』六―(二)―一〇七
- (23) 『真宗研究』第四輯(真宗連合学会)一九五九
- (24) 稲葉昌九編『諸版対校五帖御文定本』(法蔵館)一九九五年(以下『定本御文』と略す)一一―二三頁
- (25) 『定本御文』―二八
- (26) 『定本御文』―三六
- (27) 『定本御文』―八三
- (28) 『真聖全』五―四六五
- (29) 『定親全』一―四五(原漢文)
- (30) 『定親全』一―四七(原漢文)
- (31) 『定親全』一―五九(原漢文)
- (32) 『定親全』一―七六(原漢文)
- (33) 『定親全』一―六八(原漢文)

『御文』における「タノム」の語義について

- (34) 『定親全』一—一八三(原漢文)
- (35) 『定親全』三(和文篇)一—一五五
- (36) 『定親全』三—(和文篇)一四一
- (37) 『定親全』三—(和文篇)一四二
- (38) 『定親全』一—四八(原漢文)
- (39) 『定親全』二(和讀篇)一—一〇四
- (40) 『定親全』二(和讀篇)一—一八八
- (41) 『定親全』二(和讀篇)一—一九二
- (42) 『定親全』二(和讀篇)一—一九八
- (43) 『定親全』二(和讀篇)一—一九九
- (44) 『広辞苑』一—一六〇七
- (45) 『大漢和辞典』一〇—七九二
- (46) 『大漢和辞典』四—一〇二一
- (47) 『大漢和辞典』四—一一八一
- (48) 『定親全』四—(1)—七
- (49) 『続真宗大系』二—一〇七頁
- (50) 『続真宗大系』二—一〇六頁
- (51) 『定本御文』一—八三
- (52) 稲葉昌丸編『蓮如上人行實』一—一六八
- (53) 『定本御文』一—九二
- (54) 「名塩教行寺本」四の六七
- (55) 『真聖全』五—四五二
- (56) 稲葉昌丸編『蓮如上人遺文』一—四一五
- (57) 『定本御文』一—三二

- (58) 稻葉昌丸編『蓮如上人遺文』――一二七
- (59) 『定本御文』――一〇九
- (60) 稻葉昌丸編『蓮如上人遺文』――四四五
- (61) 『定本御文』――一五九
- (62) 『定本御文』――一二五
- (63) 『定本御文』――一六〇
- (64) 『定本御文』――一九六
- (65) 『定本御文』――一九二
- (66) 『定本御文』――一一〇
- (67) 『定本御文』――九二
- (68) 『定本御文』――五一
- (69) 『定本御文』――九一
- (70) 『真聖全』五――三五二
- (71) 『定本御文』――二一
- (72) 『真聖全』五――四四七
- (73) 『定本御文』――五〇
- (74) 『真聖全』五――四四五
- (75) 『定本御文』――五七
- (76) 『真聖全』五――二八七
- (77) 『定親全』四――(1)――三
- (78) 『定本御文』――二二
- (79) 『定本御文』――一六〇
- (80) 『定本御文』――九五
- (81) 『定本御文』――九〇

『御文』における「タノム」の語義について

(82) 『定親全』一一四八

(83) 『定本御文』一一〇四

参考文献

- 稲葉昌丸編『蓮如上人遺文』法蔵館、一九二八  
 稲葉昌丸編『蓮如上人行實』法蔵館、一九二八  
 稲葉昌丸編『諸版対校五帖御文定本』法蔵館、一九九五  
 堅田 修編『真宗史料集成』第二卷「蓮如とその教団」同朋舎、一九七七  
 安井廣度編『続真宗大系』真宗典籍刊行会、第二一卷、一九四一  
 親鸞聖人全集刊行会編『定本親鸞聖人全集』全九卷、法蔵館一九六九—一九七〇  
 真宗聖教全書編纂所編『真宗聖教全書』全五卷、一九四〇  
 吉谷覺寿『御文講述』法蔵館、一九一〇  
 杵 紫朗『御文章講話』永田文昌堂、一九三三  
 稲葉秀賢『蓮如上人の教学』文栄堂所店、一九七二  
 林 智康『蓮如教学の研究』永田文昌堂、一九九八  
 雲山雲珠『タノム助けタマヘ義』（真宗論題叢書上）摺網会・興教書院、一九三三  
 池田勇諦『御文勸化録』東本願寺出版部、一九九八  
 木村武夫編『蓮如上人の教学と歴史』東方出版、一九八四  
 田代俊孝『御文に学ぶ—真宗入門—』法蔵館、二〇〇二  
 松山智光『蓮如の信仰—「後生助けたまへとたのむ」考—「真宗研究」第四号、真宗連合学会、一九五九  
 村上速水「松山氏の「蓮如の信仰」批判」『同』一九五九  
 上杉思朗「御文の理解の仕方—松山氏の所説に対する批判—」『同』一九五九